

ハンドボールにおけるポストプレー とポストへのパスに関する研究

村 松 誠

I. 研究目的

ハンドボールは、1つのコートに2チームが入りみだれて得点の多少を争う競技である。

この得点に一番大切なのはシュート技術であるのは言うまでもない。このシュートをいかに有利な状況で行なうかは、大切な問題となる。そこで、過去のゲーム分析の研究を見てみると、大西氏は、表1に見るごとく、成功率の高いものとして、ブロックプレー、ポストプレー、速攻を

表 1

	総 数	全体に対する割合	成功数	成功全体に対する割合	不成功数	成功率
カット・イン	556	48.7%	141	38.5%	415	25.4%
ブ ロ ッ ク	36	3.2	22	6.0	14	61.1
ポ ス ト	89	7.8	39	10.7	50	43.8
スタンディング	49	4.3	6	1.6	43	12.2
リバウンド	20	1.7	10	2.8	10	50.0
フリースロー	197	17.2	51	13.9	146	25.9
速 攻	196	17.1	97	26.5	99	49.5
全 体	1143	100.0	366	100.0	777	32.0

表 2 西ドイツと全日本の攻撃パターン

チーム	攻撃パターン	打った数	成功数	成功率
西ドイツ	速 攻	5	4	0.80
	ポストシュート	13	7	0.54
	ロングシュート	19	4	0.21
	サイドシュート	12	9	0.75
	ミドルシュート	25	12	0.48
	P.T.	8	6	0.75
全日本	速 攻	9	8	0.88
	ポストシュート	6	1	0.17
	ロングシュート	21	4	0.19
	サイドシュート	8	3	0.38
	ミドルシュート	33	11	0.33
	P.T.	4	4	1.00

報告している⁹⁾。また、ブロックプレーを6パターンに分類しているが、この内の3つのパターンはポスト地域でのプレーであるので、ポストプレーに加えて考察することが出来ると思われる。中村氏は、西ドイツと全日本の2試合から、表2のような結果を報告している⁹⁾。セットオフENSEの場合を見ると、ロング、ミドルシュートの成功率は高くなく、ポスト、サイドシュートの成功率が高いと言えそうである。また、山口氏は、シュート率の高低と試合の勝敗との関係で、ポストシュート、速攻によるシュートの本数、シュート決定率の高さが、勝敗を左右するといえよう⁹⁾と述べている。(表3)

表3 シュート率の高低と試合の勝敗との関係

	サイドシュート	ポストシュート	ロングシュート	速攻によるシュート	計
勝チームのシュート率が高かった試合数	7	17	6	17	47
負チームのシュート率が高かった試合数	11	2	14	3	30
勝チームと負チームのシュート率がほぼ同じ	2	1	0	0	3
計	20	20	20	20	80

また、シュートの決定率もポストシュートの高さを示している報告をしている。(表4)

表4 シュートの決定率

	全シュート	サイドシュート	ポストシュート	ロングシュート	速攻によるシュート	ペナルティースロー
勝チーム	59.9	46.9	70.2	50.5	75.7	81.1
負チーム	43.9	34.3	68.1	38.3	66.6	75.4

また、私の東ドイツと全日本の試合の資料⁹⁾によっても、ポストシュートの成功率の高さが示されている。(表5)

表5

全日本			チーム	東ドイツ		
成功率	成功数	シュート数	シュートパターン	シュート数	成功数	成功率
0.666	4	6	速攻	6	5	0.833
0.500	2	4	ポスト	10	6	0.600
0.333	1	3	サイド	1	1	1.000
0.500	5	10	ロング	6	3	0.500
0.500	8	16	ミドル	11	7	0.636
0.000	0	0	ペナルティー	9	6	0.666
0.526	20	39	合計	43	28	0.651

これらの報告を見てみると、多くは、ロングシュートの成功率が悪く、しかも、ロングシュートを多く打っているチームが試合には負けているようである。また、勝っているチームは、速攻はもちろんであるが、ポスト地域、サイド地域のよりシュート成功率が高い所までボールを廻して打っていると言えると思われる。また、宇津野氏も、ポストシュートは、距離的、角度的にも

最も条件のよい、シュート成功率の高いシュート法であり、このシュートの成否は、身長差を克服するための活路として、サイドシュートとともに大きなウェイトを持ち、チーム戦術に関係する点で重要である⁹⁾と述べている。

以上のような観点から、セットオフエンにおけるポストプレーと、ポストプレーヤーへのパスについて、実際のゲームより調査、分析し、今後の指導、助言への指針を得ることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究対象

昭和57年4月24日より、同5月21日までに、駒沢体育館、及び駒沢屋内球技場にて行なわれた、関東学生ハンドボールリーグ戦の1部の試合19試合を無作為に選び、ビデオテープレコーダーに録画し分析を行なった。

2. 記録方法

まず、録画再生をしながら、次のような分類をもって、シュート分析を行なった。

○ロングシュート：フリースローラインあたりより遠くからのシュート。

○ミドルシュート：フリースローラインより内側で、ゴールとの間にディフェンスプレーヤーのいるシュート。

○ポストシュート：ポスト地域で、パサーからのパスを受け取り、そのままシュートしたものの。

○サイドシュート：いちばん外側のディフェンスを外側に抜いての、角度のない地域からのシュート。

○カットイン：ディフェンスの間を抜いて、ゴールエリアへ飛び込んでのシュート。

○速攻：ディフェンスの帰陣の遅れをついたシュート。または、帰陣しても不完全な防御のときに打ったシュート。

○リバウンド：1度シュートされたボールが、ゴールポスト、あるいはゴールキーパーに当たってはね返ってきたボールをそのままシュートしたものの。

○ペナルティースロー：ペナルティースローの判定により与えられたシュート。

以上のような分類をもって、実際に打たれたシュートで、ディフェンスのシュートカットに防御されず、完全に打ち切り、ゴールキーパー、もしくはゴールに届き、攻撃権が移動したシュートについて、記録した。

次に、ポストプレーについて、パサーのパスキャッチから、パサーのプレー、パサーのパス、ポストプレーヤーの動きとシュートの成否についてコート図の上に記録した。

Ⅲ. 結果と考察

1. ゲーム分析結果

表6は、全シュートをシュートパターンによって集計したものである。P.T.は、ペナルティースローの判定が下ったものの数である。成功数とは、シュートが成功し、得点となったものの数を示した。不成功数とは、ゴールキーパーにキープされたもの、あるいは、ゴールをはずれ、攻撃権が移ったシュートの合計である。成功数の多いものとして、速攻、ロングシュート、サイドシュートなどがあげられる。不成功数の多いものとして、ロングシュート、ミドルシュート、サイドシュートがあげられる。ペナルティースローの判定が下ったものとして、カットイン、速攻、サイドシュート、ポストシュートがある。ロングシュート、ミドルシュートでは、シュートプレイヤーが、ディフェンスを破っていないので、ペナルティースローの判定は下ることがない。

表6 シュートパターン

	成功数	P.T.	不成功数
ロングシュート	128		257
ミドルシュート	87		140
ポストシュート	61	29	24
サイドシュート	102	35	117
カットイン	92	46	51
速攻	167	38	113
リバウンド	24	8	9
ペナルティースロー	117		40
合計	778	156	751

2. セットオフenseにおける攻撃成功率

表7は、セットオフenseにおけるシュートパターンの成功数、不成功数、成功率を示したものである。表より見ると、ロングシュートでは33.2%の成功率しかなく、ミドルシュートでも38.3%の成功率しかない。そして、前述のように、ペナルティースローの判定が下ることもない。成功率の高いものとして、ポストプレー、カットインプレー、サイドプレーの順に挙げられる。成功率は、それぞれ53.5%、48.7%、40.2%である。また、ペナルティースローの判定が下ったものは、ディフェンスをすでに破っていたと考えることができ、これを攻撃成功と見れば、表7、最下段に見るごとく、ポストプレーで、79.8%、カットインプレーで、73.0%の高率の成功率を示すことになる。このような、成功率の高いプレーをチームが持つことは、戦術上重要な意味を

持つと思われる。

表 7 セットオフェンスにおける攻撃成功率

	ロング	ミドル	ポスト	サイド	カットイン
総数	385	227	114	254	189
成功 (%)	128 (33.2)	87 (38.3)	61 (53.5)	102 (40.2)	92 (48.7)
P.T.			29	35	46
不成功	257	140	24	117	51
成+P. (%)			90 (78.9)	137 (53.9)	138 (73.0)

3. ポストプレーパターン

ポストプレーパターンは、図のように8種類に分類した。1は、位置取りしたところからのパスである。バスケットボールにおける吉井氏の、破って→ついで→シュートという理論⁷⁾に従えば、位置取りをしたところで、デフェンスが破れてしまっている状態と考えられる。2は、ポストのプレーヤーが動いて、フローターよりのパスを受けてシュートしたものである。3の形は、ポストプレーヤーは動かず、フローターが動いたものである。4は、フローター、ポストプレーヤーが同じ方向に、動いたものであり、5は、フローターと、ポストプレーヤーが逆方向の動きをしたものである。6は、縦ブロックプレーである。7は、横ブロックでノーマークを作ったものである。8はスカイプレーである。図ではそれぞれ、実線でプレーヤーの動き、破線でパスを表わした。○印がオフェンスプレーヤー、△印がディフェンスプレーヤーである。表8は、図のポストプレーパターンの成功数、成功率を示したものである。L. C.とは、パスは成功したが、シュート時

表 8 ポストプレーパターンによる成功数

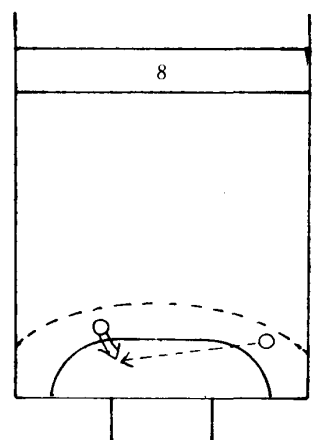
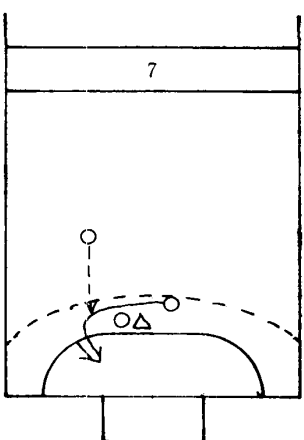
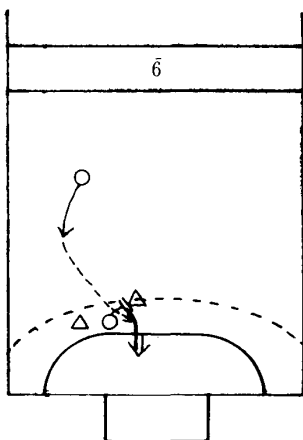
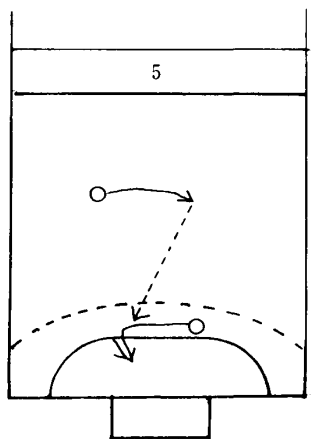
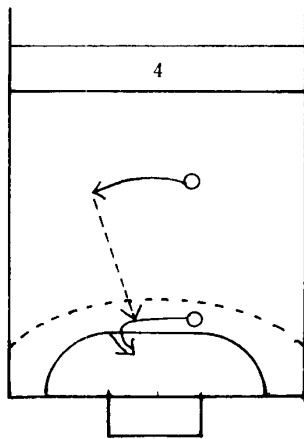
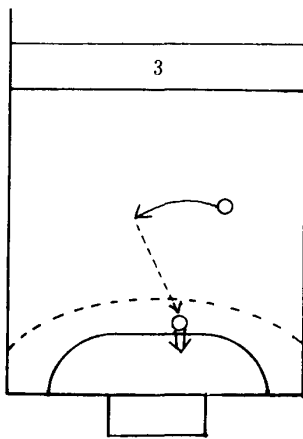
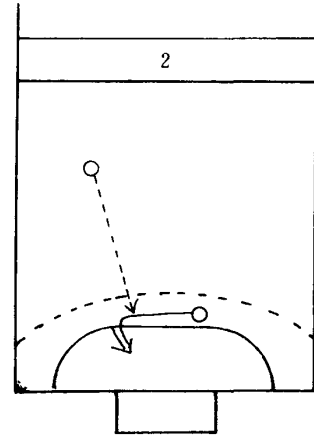
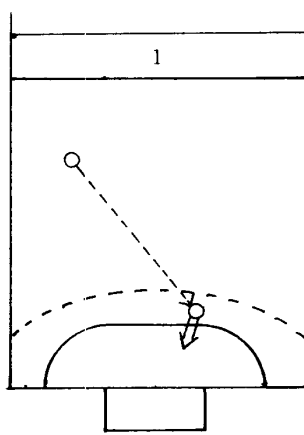
図番号	総数	成功数(%)	P.T.	不成功	L.C.	成功+P.T.(%)
1	3	3(100.0)				
2	13	7(53.8)	2	3	1	9(69.2)
3	46	21(45.7)	9	13	3	30(65.2)
4	15	3(20.0)	6	3	3	9(60.0)
5	29	13(44.5)	10	5	1	23(79.3)
6	2	2(100.0)				
7	7	5(71.4)	2			7(100.0)
8	7	7(100.0)				

にラインクロスミスをしたものの数である。表より見ると、数の多いものとして3のパターン、5のパターンが挙げられる。これらは、フローターが動くことによって、ディフェンスが引

図 ポストプレーパターン

図の説明

- …オフェンスプレイヤー
- △…ディフェンスプレイヤー
- …プレイヤーの動き
- …パスの動き
- ⇒…シュート



きずられて動き、ポスト地域での空間が多くできるためと思われる。逆に、4のパターンでは、引きずられた方向にポストプレーヤーも動くため、空間が広くならず、成功率も高くないと思われる。成功率の高いものとして、1のパターン、6のパターン、8のパターンが挙げられる。1のパターンについては、位置取りをした時点で、ディフェンスが破れてしまっている状態と考えられる。破るプレーがなく、ただパスで、ついて—シュートのため成功率が高くなっているとも考えられる。これは、ディフェンスの位置取りの遅れについて、ディフェンスのミスと考えられるため、また、オフェンスの積極的な攻撃ではないため、数は少ないと思われる。3から6までのパターンについてはフローターが主に破れを作っていると思われる。ゆえに、ポストプレーの成立要因の1つとして、フローターの動きが重要になってくるのではないかとと思われる。6のパターンについては、ブロッカーのブロックプレーが大切であるが、本調査においては、ブロッカーが、ブロックに入った時点でプッシングの反則を取られるケースが多くあったため、総数としては少なくなっている。しかし、ブロックが正確にできれば、きわめて成功率の高いプレーと言えよう。8のパターンについては、ゴールエリア内のプレーのため、もはやディフェンスは破れていて成功率も高いと言える。7のパターンは、ディフェンスプレーヤーが、ポストプレーヤーの後を追ったのでは間に合わないため、内側を通り先廻りしようとして、ライン内防御を取られ、ペナルティスローになってしまっている。これも、確実に、アウトナンバーを作るため、成功率が高いと言える。全体的には、単純な動きのコンビネーションが多く見られる。複雑なコンビネーションは、あまり多くは見られないが、成功率としては高いと言える。

4. パサーのパスする前の動きについて

表9は、パサーのパスする前の動きのパターンを分類し示したものである。1番目は、キャッチした所からすぐに、ポストプレーヤーにパスしたものである。2番目は、キャッチしてから、移動し、ディフェンスを誘ってからのパスである。3番目は、キャッチからドリブルで位置を変え

表9 パスする前の動きとシュートの成功数

	プレイヤーの動き	総数	成功数(%)	P.T.	不成功数	L.C.
1	キャッチーパス	20	14(70.0)	2	3	1
2	キャッチー動いてパス	53	24(45.3)	14	11	4
3	キャッチードリブルパス	21	11(52.4)	8	1	1
4	キャッチードリブルフェイントーパス	4	2(50.0)	1	1	
5	キャッチーフェイントーパス	16	6(37.5)	4	5	1
6	キャッチーフェイントードリブルパス	8	4(50.0)		3	1

でのパスである。4番目は、キャッチして、ドリブルで位置を変え、さらにフェイントをしてからのパスである。5番目は、キャッチからフェイントをかけてからのパスである。6番目は、さらにドリブルをしてからのパスである。1番目のパターンは、ポストプレーパターンの1と2のパターンになる。このプレーもある意味では、ディフェンスのミスをついたプレーと考えられ、成功率も高いと言えると思われる。数の多いものとして、2番目のパターンが挙げられる。これは、パサーが積極的に破れを作った状態と考えられるが、プレーが単純なため、ディフェンスプレーヤーにプレーを予測され成功率が低いと思われる。しかし、ディフェンスが追いかけるため、ペナルティスローになるものも多いと思われる。パスプレーのパス直前の動きで、フェイントとドリブルがあるが、フェイントからパスのパターンの方が、総数でも、成功率でも、ドリブルからパスより低い数値を示している。これは、ドリブルより、フェイントの方がポストプレーヤーの合せがむずかしいと言えることと思われる。また、大西氏等の研究では、ドリブルはディフェンスを引きつけるのに役立っていると思われると述べている⁹⁾。フェイントより、ドリブルの方が移動距離が大きいため、よりディフェンスの移動を大きくするため、後方の空間が大きくなるためとも考えられる。全体的には、動きのパターンが増える程、数も少なくなっている。これは、動きのパターンが多くなればなる程、動きの連続がむずかしくなるためと、ポストプレーヤーとのコンビネーションがむずかしくなるためと思われる。また、トレーニングの中に、このような連続動作を作ること、コンビネーションを合せることも考えていくべきではないかと考えられる。

5. ポストへのパスの種類について

今回の調査では、表10に示した通り、ショルダーパス、ラテラルパス、ジャンプパス、アンダーパスの4種類が見られた。ハンドボールのパスに関する研究⁹⁾において、大西氏等は、8種類に分類している。そして、そのほとんどがショルダーパスであると報告している。本調査では、スタンディング、ステップランニングの項目については、特に分類はしていない。これらは、ショルダーパスを、ステップの踏み方によって分類したものであると考えられる。また、この調査では、ラテラルパスは、全体の0.3%しか使われていない¹⁰⁾。本調査では、全体の8.9%と大巾な

表 10 パスの種類とシュートの成否

パスの種類	総数	成功(%)	P.T.	成功	L.C.
ショルダーパス	80	39(48.8)	21	16	4
ラテラルパス	11	5(45.5)	2	2	2
ジャンプパス	25	14(56.0)	5	4	2
アンダーパス	6	3(50.0)	1	2	0

増加を示している。これは、大西氏等の調査が昭和48年であり、その後の、選手の体格の大型化、それに加えての松ヤニ使用の増加によるパス技術の多様化のためと思われる。表8に見る通りショルダーパスが全体の約7割をしめている。

次に、ジャンプパス、ラテラルパスアンダーパスの順である。今回の調査では、バックパスは全く見られなかった。しかし、このバックパスもディフェンスを引きつけてのパスに有効なものと思われる¹¹⁾。今回の調査のレベルのゲームでは、ポストプレーの合わせがむずかしくて、行なわれなかったとも思われる。大西氏のパスの種類と使われ方の調査¹²⁾においても、バックパスは全体の0.3%しか使われておらず、使い方のむずかしさを示していると思われる。2番目に数の多いジャンプパスは、ジャンプしてのシュートフェイントになったり、移動距離が大きいなどから、よりディフェンスを引きつけることができていると思われ、成功率は一番高くなっている。また、大西氏等は、パス時の動きで、ディフェンスを引きつける場合は、他の場合に比べジャンプすることや、ステップスする際にシュートモーションが入る割合が高くなっている¹³⁾と述べている。ラテラルパスは、ディフェンスに方向を読まれにくい点や、反応の遅れをつける利点があると思われる。このようなパスは、もっとゲームの中で使われてもよいのではないかと思われる。今回少なかったのは、ディフェンスと同じようにポストプレーもまたパスの予測がむずかしかったり、反応が遅れたりする原因があると思われる。アンダーパスは、近くでの手渡しパス、ディフェンスとの間合いがなく、腕の下から出したようなパスである。

IV. 結 論

セットオフenseによる攻撃成功率の高いものとして、ポストプレー、カットインプレー、サイドプレーが挙げられ、ペナルティースローの判定が下ったものを攻撃成功とみれば、ポストプレー、カットインプレーでは高率の攻撃成功率を示していた。

ポストプレーを8種類に分けて見たところ、数としてはポストプレーは位置りをしたままで、パサーがディフェンスを誘って破れを作ったパターンが一番多く見られた。成功率の高いパターンとして、数は少ないが、縦ブロックプレー、横ブロックプレー、スカイプレーなどが挙げられる。

パサーのパスする前の動きは、キャッチをしてディフェンスを誘ってのパスが一番多く見られた。また、パスする前のプレーの数が増える程、数も多く見られなかった。しかしながら、トレーニングの中に動きの連続を取り入れれば、成功率も上がるのではないかと考えられる。ドリブルパスのパターンよりフェイントーパスのパターンの方が成功率が低かった。

パスの種類については、ショルダーパスが全体の7割以上も見られた。次にジャンプパスが多く見られ、シュート成功率も高かった。これは、ジャンプパスがより有効にディフェンスを引き

つけているものと考えられる。ラテラルパスも数は少ないが見られた。これはシュート成功率としては低く、ポストプレーヤーの予測、反応が遅れるためと考えられる。今回の調査では、バックパスは一本も見られなかった。

引用文献

- 1) 大西武三ほか、「ハンドボールの攻撃パターンに関する研究」日本体育学会第22回大会号, P 475, 1971。
- 2) 中村弘司,「西ドイツの戦術と全日本の今後」全日本教職員ハンドボール連盟紀要 第3集, P 24, 1980。
- 3) 山口剛之「試合におけるシュート分布についての一考察」全日本教職員ハンドボール連盟紀要 第5集, P 33, 1982。
- 4) 村松誠,「東ドイツと全日本の戦術比較の一考察」全日本教職員ハンドボール連盟紀要 第5集, P 37, 1982。
- 5) 宇津野年一, 最新ハンドボール技術《攻撃編》P 123, 1975。
- 6) 宇津野年一, 最新ハンドボール技術《攻撃編》P 139, 1975。
- 7) 吉井四郎, 現代スポーツコーチ全集 バスケットボールのコーチング 戦法・作戦編, P 299, 昭和53年。
- 8) 大西武三他「ハンドボールのパスに関する研究」日本体育学会第24回大会号, P 341, 昭和48年。
- 9) 同 上
- 10) 大西武三他, スポーツQ&Aシリーズ実戦ハンドボール, P 9, 昭和55年。
- 11) 同 上 P 9。
- 12) 同 上 P 8。
- 13) 8)に同じ。

資料 ポストプレーパターン

図の説明

- … オフェンスプレイヤー
- △ … ディフェンスプレイヤー

---> … パスコース

→ … プレイヤーの動き

∞ … ドリブル

F … フェイント

ゴール内の記号

○ … ゴール成功

× … ゴール不成功

P.T. … ペナルティスローになったもの

L.C. … ラインクロスをしたもの

